

「分かってくれない」という訴えは何を意味しているのか

——当事者の発言と多様な取り組み事例から

中村好孝

滋賀県立大学人間文化学部人間関係学科

1. 問題の所在

本稿の対象は、「分かってくれない」「理解してくれない」という訴えや感覚である。現代社会に生きるわれわれにとって、人に分かってもらえないことは、人を分かることや人が分からないことよりも、しばしばより切実である。それが切実であることを示しているのは、本論で挙げるような多様な訴えがきわめて多く存在することと、そう訴える人びとに対応するカウンセリング、セルフヘルプ、コミュニケーション論などの多様な取り組みが今日存在することである。しかし、これらが一つの問題群をなしているということは、それぞれの問題について「分かってくれない」と訴える人びとにも、各種の臨床現場の人びとにも、十分に理解されていない。本稿全体で示す中心的な主張の一つは、そこに「分かってくれない」という共通する訴えが存在すること自体である。そしてその上で、本稿の課題は、「分かってくれない」という訴えの基本的特徴を明らかにし、それを解消しようとする様々なアプローチから、この訴えの困難と可能性を検討することである。

「分かってくれない」という訴えは、一見すると個人の心理的・精神的生きづらさの表出にすぎないようにも見える。そしてそう捉えられる場合、承認の不足や格差、自己肯定感の問題としてアプローチすることがありうるだろう。たしかに、これらの訴えが「何を」分かってくれないと言っているのかという、その内容は、内面的な苦痛や辛さであることが多い。しかし、その訴えが特に集中して見られるのは、現代社会における典型的な内面的問題とされることの多い、ひきこもりや摂食障害、自傷などの当事者の語りにおいてである。この訴えの社会的偏在性が示すのは、それらが単なる内面的問題ではありえず、社会学的分析の必要な現象であるということである。しかしこれまでの社会学は、このような訴えをうまく対象化してこなかった。社会学は、理解することや理解の不可能性については多くの議論をしてきたが、理解されることについてはほとんど考えてこなかったのではないだろうか¹⁾。本稿は理解されることについての社会学を目指すもの

である。それはつまり、現代社会において心理的・精神的な苦痛として表出される内面的問題を、社会学が分析対象とする仕方を考えるということである。

本稿が扱う主要なデータは二種類である。第一に、上述のようなひきこもり、摂食障害などの多様な問題を抱える当事者の著書や雑誌等における発言である²⁾。「分かってくれない」「理解してくれない」「分かってほしい」などのフレーズを手作業で収集したものがデータとなる。範囲の限定できるデータを網羅的に検索するなどの方法はとっていない。第二に、「分かってくれない」と訴えがちな人びとに向けられたコミュニケーション論や、多様な支援者の著書である。

まず2.で「分かってくれない」という訴えや感覚の基本的な特徴を明らかにする。その際、訴えとともにそれらを解消しようとする取り組み事例を見る。次に3.で問題の構図を分かりやすく整理するために、分かってくれないと訴えない人びととの比較を行なう。ここでは、分かって欲しいか欲しくないか、分かってもらえていると思っているか分かってもらえていないか、という単純な相関分類により、分かれることについての4類型を提示する。最後に4.ではまとめを行なう。

2. 「分かってくれない」の基本的な特徴

「分かってくれない」と訴えるのは、具体的には、ひきこもり、不登校、自傷、摂食障害、虐待、非行、精神障害、性同一性障害、花粉症の人などの当事者であることが多いが、非常に多様な人びとである。彼らはその多様性にも関わらず、同じように「分かってくれない」と訴えているのであり、その訴えには以下のような共通する特徴がある。

(1)弱者から強者への訴え

第一に、これは「弱者」から「強者」への訴えである。「理解ある上司」とは言うが「理解ある部下」とは言わない。分かってくれないのは、大人であり、先生であり、夫である。そう訴えるのは、子どもであり、児童・生徒であり、妻である。ただしこの強者は、むきだしの権力者という意味ではない。

たとえばDVや家庭内暴力においては、加害者側こそが、自分は理屈ではかなわない弱者だと感じている。以下はDV加害者の言葉（をカウンセラーが紹介したもの）である。

自分がなぜ暴力をふるわざるをえなかったか、というところをわかっていただきたい。そこにいたるまでには、どんなに言葉で追い詰められたか。はっきり言って僕はね、言葉じゃ女房にはかなわないんですよ。（上野・信田 2004:175）

私の考えでは、「分かってこない」という訴えの最も基底的特徴は、この弱者から強者への訴えという点である。この点をよく示すために、アサーティブ・トレーニングの取り組み事例を取り上げよう。アサーティブ・トレーニングは、何を分かかってほしいのかを明確にして、それをどうすれば伝えられるのかを考える、という手法のトレーニングである。書物から事例と解説を引用する。

妻（掃除機をかけています）「はあ……テレビおもしろい？ いいわね、最近テレビも見られないくらい忙しくて……」
夫「見たらいいのに……」
妻「ああ……まったく、疲れる……」（とため息をつきながら掃除を続ける）」

たいへん曖昧な言い方をしながら、妻は、夫がなんとか自分の気持ちをわかってくれるのではないかと願っています。往々にして私たちはこのような態度を示しますが、どうも相手の人はわかってくれません。（特定非営利活動法人アサーティブジャパン 2007:23-24）

アサーティブ・トレーニングは、このような問題意識のもとに、分かってこないという感覚の内容を明確にして、それを具体的に伝えるという、コミュニケーション論の一つである。しかしアサーティブ・トレーニングの特徴は、根幹は対等性の原則や自己信頼感であるという主張である。上のような夫婦の事例に続けて、ディクソンはこう述べる。

こうした状況にいる女性たちの話を聞いて気づくのは、彼女たちが、いい加減腹に据えかねている状態であるにもかかわらず、心の奥深くで

は、自分には相手に要求する権利がないと信じていることです。あるいは、言葉にする必要などない、相手は自分の気持ちを察してくれて当然だ、だから相手は要求通りにできるはずだ、できないのは自分が悪いからだと思ってしまうのです。（特定非営利活動法人アサーティブジャパン 2007:24）

この点は重要である。これは単なるコミュニケーション・スキルの向上では解消しない問題である。アサーティブ・トレーニングは、自分と相手とは対等な関係だという原則を強調することによって、この感覚を打ち消すことを試みている。

(2)相手の親密性

第二に、その訴えの相手である「強者」は、ある程度、親密な相手である。人格障害や自傷、家族問題の当事者の著者の本から引用する。

身内でなければ、こんな傷つだけの関係、とっくに捨てているのに。それでもなお、わかってもらいたいと心の中で願ってしまうのを、どうにもできないでいます。（卯月 2003:120）

分かてほしい、理解してほしいと望む相手は、親密な相手である。このこと自体は意外ではない。ここから導かれる対応の一つは、相手が親密でなくなれば良いというものである。斎藤環は、子どもがひきこもった場合、親は愛よりも親切という心構えで子どもに接するようにすべきだと主張してきた（斎藤環 1998）。逆の立場から、ひきこもり当事者の勝山実も同じことを述べている。勝山によれば、これまでは父親は恩着せがましく理解力がないと憤慨していたが、父親のことを父ではなくクソジジイだと思うことにすると、自分がないものねだりをしていたことが分かった（勝山 2011:31）。

(3)訴えの内容の曖昧さ

第三に、その訴えの内容は曖昧であることが多く、しばしば訴えている本人も、自分が何を訴えたのか分からない。しかし、辛さや苦しみなどのネガティブな内容である。以下はひきこもり当事者の文章。

誰もが、「どういう気持ちだか、言ってみる」と迫る。中には理解しようと一生けんめいになってくれる人もいた。けれど僕自身にも、この気持ちを表現する言葉が見つからない。「僕だけが人と違うので、つらい」としか言えず、そう言えば「甘ったれだ」と返ってくる。(特定非営利活動法人 ASK 2004:5)

この点も、「分かってこない」という訴えの根本的な特徴であり、おそらくその苦しみの中心的部分であろう。訴えたいことが分かっていたら、コミュニケーション・スキルを磨くなどの方法もありうるが、そもそも自分が何で苦しんでいるのか分からない場合には、それは役に立たない。そういう場合に助けになるのが、分かってくれる専門家であるカウンセラーや心療内科医、精神科医に相談に行くことである。

ただし、カウンセラーや精神科医は単純に「分かってくれる」人ではない。第一に、訴えの内容そのものというよりも、その訴えに困っているという気持ちに焦点を合わせるからであり、第二に、受容を提供した後で、今後それを自分で訴えるための方法を身につける助けをすることになるからである。たとえば臨床心理士の梶原千遠は、摂食障害の少女に「痩せて心配してもらいより、本当に不安なのだということを知ってもらいようにしましょうよ」(梶原 2004:119)とアドバイスする。

分かってくれることの専門家と思われたカウンセラーは、たしかにまずは受容を提供するとしても、その後、分かってこないという問題に自分で取り組むための支援をしていると言える。

(4)外見上は分かりづらい辛さ

第四に、この訴えは、その辛さや苦しみが外見上は分かりづらいという特徴をもっている。「花粉症のしんどさのひとつは、そのしんどさがなかなか他人に解ってもらえないことである」(柴田 1996:131)。身体障害者と比べて、知的・発達・精神障害者のほうが「分かってこない」と訴える傾向があるのは、このためである。

このようなわかってこないという感覚で悩む時、専門知によってレッテルを貼られることが救いになることがある。そこでは、うつ病(大阪

精神神経科診療所協会うつ病診療研究グループ 1998:79)、障害者(石川 2007:225)、共依存(澁谷 2009:215)、自閉症(山口 2011)、病気(斎藤 1991:下 155-156)などのレッテルが使われる。また、精神障害は一見すると困難が分かりにくい場合があるので、専門家が発行する障害者手帳や薬についての説明書を提示したり、福祉の専門的な支援者に職場に来てもらうことによって、自分の不便なところを分かってもらおうということも行なわれる(多田 2007)。

ただしこの専門知に依拠するという対処法には欠点がある。自分が抱えていたいわく言い難い「分かってこない」訴えと微妙に違う概念や物語で代用してしまう危険性である。

(5)同じ悩みの当事者には理解される

第五に、しかしながら同じ経験をしている人には、その分かって欲しい内容が分かってもらえるはずだという期待がある。以下は摂食障害当事者から摂食障害当事者(野村さん)への手紙。

私も摂食障害です。野村さんに比べれば短いものですが、もう4年目になります。(中略)そう簡単に胸の内を表現できません。野村さんならわかってももらえると思うのですが。(野村 2008:137)

セルフヘルプ・グループやピア・サポートが、「分かってこない」と訴える人びとに有効なのは、このためである。セルフヘルプ・グループとカウンセラーは、分かってくれる人をどこから調達してくるという意味では同じである。ただ、カウンセラーは分かってくれる専門家であるのに対して、セルフヘルプ・グループは、分かってくれる人を自分たちで互いに提供し合うという違いがある。

セルフヘルプ・グループが有効なのは、人は援助することで最も援助を受けるからである、という考え方は、従来ヘルパー・セラピー原則として論じられてきた(Gartner & Riessman 1977=1985)。しかし本稿の分かってこないという問題にとってより重要なのは、同じ経験をしている人が聞き手(分かってくれる人)になってくれるという仕組みである。摂食障害のセルフヘルプ・グループの手紙から引用する。

過食は私にとって最高のストレス解消法で、リラクソスの仕方なのです。(中略)全く麻薬のようなものではないかと思えます。こんな事、わかってもらえるのは会員の方々だけだろうと思ってます。(斎藤 1991: 上45)

分かってこないという問題は、専門家にもなかなか分かってもらえないし、見たところ分からないからこそ深刻化する。ここに、同じ経験をしている人の集まりであるセルフヘルプ・グループの意義がある。これは、「物語を聞いてくれる「誰か」、あるいはスタイルを見てくれる「誰か」」(伊藤 2013:iv)としての意義である。

(6)内部での考え方の対立

第六に、このような訴えの曖昧さの背景にあるのは、この「分かってこない」内容と対立する考え方が存在し、そしてそれはそれで理があるという自覚が、無意識かもしれないが存在することである。簡単に言えば、ひきこもりや摂食障害などに対する後ろめたさである。以下は女子高校生の作文であるが、ここでは彼氏の本当の人格の良さと、外見がヤンキーのようで大人の目から見ると望ましくない、という対立したことがいずれも自覚されている。

父が言いたいことも分からないわけじゃないし、なるべく言うことも聞こうとも思っている。でも、父が彼の事を悪く言うことだけは許せない。外見ははっきり言ってヤンキーな彼だけど、中身は誰にも負けないくらい良いと思う。そんな彼の本当の人格を父はなぜ理解してくれないのか。(平井 2004:69)

セルフヘルプ・グループの意義は、同じ経験をしている聞き手がいることだけではない。そこには支配的物語から逸脱する共同体の物語が存在する。これは、分かってこない感覚と、それに反するが理があるとも思ってしまう内面化された正論とで引き裂かれて口ごもるという問題に対する助けとなる。たとえば、過食は最高のストレス解消法であるという(5)で引用した意見は、支配的物語から逸脱しているが、セルフヘルプ・グループの仲間には言える。また介護にお

いては献身的介護という支配的物語があるが、認知症家族会の交流会においては、手抜き介護について躊躇なく語ることができる。

この「手抜き介護」は、さきほどみた私たちの社会の支配的物語である「献身的介護」から大きく逸脱します。そのため、私たちは、この「手抜き介護」について公衆の面前で語ることが躊躇します。しかし、交流会に参加する家族は、この「手抜き介護」について躊躇することなく語ることができるのです。(荒井 2013:47)

このようにセルフヘルプ・グループは、分かってこないという問題に対して、分かってくれる聞き手を互いに提供し合うことによって、支配的物語から逸脱する自分たちの物語を語ることを可能にしている。

以上が「分かってこない」という訴えの基本的な特徴である。あらゆる事例に共通するとは言えないが、「分かってこない」という訴えはこれらの特徴をもっていることが多い。それでは次に、「分かってこない」と訴えない人と比較することによって、この訴えの困難さと可能性をさらに明確にしよう。

3. 分かれることについての4類型

分析的に考えると、社会には分かってもらえている人と分かってもらえていない人が存在する³。この分断線や、「分かれることの社会的な配分のあり方」とでも呼ぶべきものは今日非常に重大なもので別の機会に検討しなければならないが、もう一つ、そもそも分かってもらいたい人とそうではない人という区別も分析的には存在する。この二つの軸を使うと、「分かってこない」を一つの象限として含むような相関分類を作ることができる(表3-1)。

(1)分かってもらえているが、むしろ分かってもらわなくて結構。貴戸理恵が論じる不登校当事者の

	分かってもらわなくてよい	分かってもらいたい
分かってもらえている	(1)理解に対する倦怠	(2)理解に対する満足
分かってもらえていない	(3)理解の拒否	(4)「分かってこない」

表3-1

「わかられすぎてしまう」ことへの「倦怠」(貴戸2004)。

(2)分かってもらえているし、分かってもらいたい。これは自分の期待が満たされている状態であるが、そこには危険もある。

(3)分かってもらえていない、かつ分かってもらわなくて結構。ハイカルチャーの趣味や、フェミニズムの論者にも見られるスタンスでもある。

(4)分かってもらえていないが、分かってもらいたい。本稿の対象である「分かってこない」はここに当たる。

以下、それぞれの類型について、詳しく見ることにする。

(1)理解に対する倦怠

貴戸理恵は、不登校の経験者であると同時に調査者でもあるが、不登校当事者は分かってもらえないことにもわかられすぎてしまうことにも怒っていると述べる。貴戸理恵の主張に一貫しているのは、不登校のことをそんなに簡単に分かってほしくはないということである⁴。

〈当事者〉の示す不快や怒りは、そのような「理解」という名のもとに行なわれる他者性の剥奪に対して向けられている。〈当事者〉は「分かってもらえない」ことにじれているばかりではなく、「わかられすぎてしまう」ことに倦怠もしているのであり、そこで問題となっているのは、「語りえないこと」よりもむしろ「語らされること」、執拗に耳を傾けられ、善意と期待を込めて言葉を待たれるということである(貴戸2004:257)。

摂食障害経験者の伊藤比呂美も、自分より若い世代の摂食障害当事者に向かって、こう述べている。まわりに理解されている環境は「真綿にくるまれた」ような感じがする。伊藤自身は、そのような「理解したがっている」環境に反抗心が湧き起こる人間なので、かつての自分がもし理解してもらっていたなら、自力では脱出できなかっただろう(斎藤1991:下182)。

これらの、分かれることに対する倦怠や、理解したがっている環境に対する反抗心や危惧感、貴戸の言葉を使えば「他者性の剥奪」に対する不快や

怒りである。それはおそらく、理解する側の勝手な理解(または誤解)が押しつけられ、しかもそれを理解される側である自分が拒否できないという状況に対する不快であろう。これが不快であることは不思議ではないが、考えなければならないのは、このように理解する側が理解される側の他者性を剥奪するということが、どのような条件下で生じるのか、ということである。

第一に、他者性の剥奪について。対等な二人が、ある一つの対象を理解するという相互行為の場合、理解したかどうかをお互いに確認し、相手の理解が間違いであれば訂正させることは可能であるし、自分はそれを理解できないと表明することも可能である。しかし、上下関係にある二人の場合は異なる。なだいなだは、「分かる」という言葉は相手の話を遮ったり相手をもたげさせるために使われると指摘している。「部下の話をお互いに確認しているときに、上役が「分かった」といったら、部下はそこで話をやめなければならない」(なだ1998:13)。なだは、上役の部下に対する「分かった」、夫の妻に対する「もう分かったよ」という例を挙げているが、いずれにしても、権力関係の上位にある者が理解したということが下位にある者に示されており、下位はその理解が勝手な誤解であったとしても否定できない。これこそ、理解する側の理解が、理解される側の他者性を剥奪する状況である。貴戸が言うような他者性の剥奪は、このように、理解される側が権力関係の下位にあり、上位の者に理解される時のみ生じる。つまり、分かれているがそれが嫌だという類型(1)が生じる条件は、分かる側が権力関係の上位で分かれる側が下位、という上下関係である。不本意な理解を表明されることによって、分かれる側と分かる側の上下関係が表面化してしまうことが、不快の一つの原因である。この点は分かってこないという訴えと同じ構造にある。

第二に、その不快さについて。不登校経験者と学校に通い続けた者が、お互いの経験を理解できない程度は、原理的には同じはずである。ではなぜ学校に通い続けた者はそれほど不快にはならないのだろうか。なだの「分かる」論は、もう一つ、先生が子どもに言う「分かった?」という例を挙げている。子どもは、分からないことを恥だと思うので、分からなくても「分かった」と答える。ここでも、上位の者の「分かる?」という言葉は下位の者を黙らせ

る。つまり、下位の者（たとえば不登校経験者）は上位の者（学校に通い続けた者）を分からなければ恥ずかしいが、逆は恥ずかしくないのである。ここでもまた、理解の不可能性は非対称になっており、下位にありかつ理解される側だけが、不快な思いをすることになる。

(2)理解に対する満足

第二の類型は、分かってもらいたく、分かってもらえているという類型である。摂食障害当事者（香里）は、母親からの「こんなに香里が苦しんだなんてちっとも知りませんでした」というファックスを読んで、「やっとわかってもらえた、と読みながら涙が出てきた」（富田 1997:220）。また、いま現在、分かってくれないと訴える人は、この分かってくれたという状況を望ましい未来として想像することがある。その時「いつか」という言葉が非常にしばしばともなう。たとえば、ある同性愛者はこう語る。「どうしても、いつか、お母んに理解してもらおう、そう思っとるんよ」（井田 1997:351）。

しかしこの類型にも危険性は存在する。これをわれわれが渴望しているということ自体が、利用されることがある。たとえば、ある暴走族少年はこう述べる。「俺は親も先生も信用していませんでした。」「でも、ヤクザの兄貴だけは俺の気持ちをわかってくれます」（東京母の会連合会編 2000:137-138）。

これを活用しているのが、マーケティングや詐欺である。たとえば開業医の三浦勇夫は本の中で、看板を安く作るという詐欺に自分がだまされたエピソードについて書いている。「何より「真面目に医者をやっている」の一言にほだされました。「わかる人にはわかってもらえるんだ」（三浦 2009:35）とってしまったのである。

つまり、この(2)は分かってくれないと訴える人にとっては理想の類型であるが、だからこそ、分かってくれないと訴える人がここに飛びついてしまう可能性がある（もちろんこの可能性はネガティブなものとは限らない）。

(3)理解の拒否

分かってもらえていないが、分かってもらわなくてよい、という類型が(3)である。「わかってもらおうと思うは乞食の心」（田中美津）、「私はフェミニズムがわかりやすい思想だと思っていません。フェ

ミニズムは徹底的に「他者」の思想ですから、あんたにわかるわけがない、わかってたまるか、というところがあります」（上野千鶴子（花崎 2002:257））などのフレーズに代表される。上野も田中もウーマン・リブやフェミニズムの論者だが、この類型に当てはまるのはそれだけではない。他にしばしばこのスタンスが見られるのは、文化ジャンルである。たとえばある文化的趣味にプライドを持っている場合、大衆には分かってもらえていないが、それで良いと思っているということがありうる⁵。

しかし分かってもらえていないことは事実である。そこに微妙な裂け目が存在している。つまり、自分としてはこの趣味は良い趣味だと思っているが、多くの人がそうは思っていない、という状況は残る。その状況でこのスタンスを維持するためには、何らかの根本的なプライド・自己肯定の感覚が必要であろう（これはおそらく、分かってくれないと訴える人に最も欠けているものである）。通常この(3)の人たちの自己肯定の感覚は、何らかの集合的な感覚に支えられているが、そうでなければ、自己肯定を維持するために、理解しない大衆（文化的な趣味の場合には「にわか」）を見下す危険性が潜んでいる可能性もある。

田中美津は、(3)でありながら、そのどちらにも依拠していない。田中は、その状況にとり乱しつつ踏みとどまることを主張する。そのフレーズが「わかってもらおうと思うは乞食の心」である。

「リブって何ですか」と聞いてくる男に、ともしればわかってもらいたいと思う気持ちがわいてくるからこそ、顔をそむけざるをえないあたしがいるのだ。男に評価されることが、一番の誇りになってしまっている女のその歴史性が、口を開こうとするあたしの中に視えて、思わず絶句してしまうのだ。（中略）顔をそむけ、絶句するあたしのその〈とり乱し〉こそ、あたしの現在であり、あたしの〈本音〉なのだ。（田中 2004:88）

田中はわかりやすい例をいくつか挙げている。田中があぐらをかいて座っていた時に、好きな男が入ってくる気配を察して、女らしい座り方である正座に変えてしまったことがあった。その時、もしも意識的にどうすべきかを自問していれば、当時リブ

の運動を始めていた田中はあぐらのままでいいと答えただろう。しかし田中によればそれは本音ではない。一方の、〈女は女らしく〉という論理は、すでに田中の内面に血肉化されているため、無意識の本音と化している。他方には、女らしさを否定するリブの理屈、理論がある。重要なのは、その二人の自分、とり乱す自分に出会うことである。

あぐらから正座に変えた、そのとり乱しの中にあるあたしの本音とは〈女らしさ〉を否定するあたしと、男は女らしい女が好きなのだ、というその昔叩き込まれた思い込みが消しがたくあるあたしの、その二人のあたしがつくる「現在」に他ならない。(田中 2004:70)

この(3)に踏みとどまることは、生産的なスタンスの一つであろう。しかし多くの人はその踏みとどまれないからこそ、血肉化された女らしさに依拠する(2)か、それを否定する理屈(=専門知)に依拠するか、(4)のように分かってこないと言口ごもってしまうことになる⁶。

(4)分かってこない

最後の類型が、分かってもらいたいが、分かってもらえていないという「分かってこない」である。主な特徴は2.で挙げた。以下のひきこもり当事者の例で再確認しよう。

働きに出なければいけないのは分かっていたし、親が心配していろいろなことを言っているのも分かっていました。(中略)せめてもの罪ほろぼしで、家のそうじなど家事を手伝っていましたが、「そんなことをするより仕事に出てほしい……」などと言われ、僕の気持ちは理解してもらえませんでした(心の手紙交流館 2001:8)。

ここには、養ってくれている親と、ひきこもっている自分との上下関係が意識されている。しかし親という親密な相手には、自分がのうのうと生活しているわけではないという気持ちは理解してほしい。しかし自分がひきこもっている辛い気持ちは、一見分からない。そして働かなければいけないという正論や、親は自分のことを心配して色々やってくれているということも、内面化されている。だからこそ

言葉に詰まるのである。

本節で提示してきた四類型の中で比較すると、「分かってこない」という訴えはどのような困難と可能性を持っているだろうか。

第一に、この訴えは権力上の上下関係を背景にすることが多い。「分かってこない」と類型(1)理解に対する倦怠は、対極にあるはずだが、いずれも権力上の上下関係を背景としていた。そしていずれもその上下関係が、分かってこないつらさや他者性の剥奪に対する不快と結びついていた。

第二に、(2)のような理解に対する満足は、例外的あるいは一時的なものになる可能性が高い。この「分かってこない」という訴えは、おそらく原理的に無理難題な要求なのではなかろうか。2.で紹介した各種の臨床現場の事例は、同じ問題の当事者や分かることの専門家といった分かるはずの人の調達、既存の枠組み・専門知に自分を合わせることで、などの、いわば搦め手の取り組みとなっていた。そもそも、「分かってこない」と訴えるそれぞれの人が何を分かってほしいのか、分からないことが多いのである。クレームの数歩前のいわく言い難い何かを分かってもらいたいという訴えの困難さも、本稿で確認できたことの一つである。

第三に、しかしだからこそ、このような原理的に困難なことが行なわれる時、そこには社会の生成の論理に似たものが見られる可能性があるのではないか。(3)の田中美津はそのような事例として検討する価値があるように思える。

4. 結論とまとめ

本論文は、分かってこないという訴えの諸特徴を概観し、この訴えに対して行なわれている取り組み事例を紹介し、分かってこないと思わない人との四類型を提示して、「分かってこない」という訴えの困難さと可能性を考察してきた。権力的な上下関係が背景にあることが多いこと、この訴えは充足することが原理的には困難であるが、しかし他の類型と重ね合わせてみると、その可能性について示唆が得られそうだとということが、現時点での結論である。稿を改めて論じる必要があるが、そのような可能性を示している実践として、べてるの家の実践がある。べてるの家は、問題を明確化する当事者研究とコミュニケーションを練習するSST(ソーシャル・スキルズ・トレーニング)の組み合わせに

よって、分かってこないという問題に取り組んでいる。しかもセルフヘルプ的な形態でもある。また、既存の専門知に依拠するという方法はそれに取り込まれる危険性があったが、べてるの家の当事者研究では、自己病名を名付けることでそれを回避している。

分かってこないと訴える人は多様であるが、同時に共通のパターンが存在した。本論文は訴えそのものではなく周囲からこの問題に取り組んだが、今後はこの訴えられる問題のパターン自体について、考察する必要がある。

文献

- 荒井浩道, 2013, 「〈聴く〉場としてのセルフヘルプ・グループ」伊藤智樹編著『ピア・サポートの社会学』晃洋書房。
- 江原由美子, 1985, 『女性解放という思想』勁草書房。
- Gartner, Alan & Riessman, Frank, 1977, *Self-Help in the Human Services.* (= 1985, 久保紘章監訳『セルフ・ヘルプ・グループの理論と実際』川島書店。)
- 花崎皋平, 2002, 『〈共生〉への触発』みすず書房。
- 平井尚一, 2004, 『思春期少女達は家族をどう見るのか』あけび書房。
- 井田真木子, [1994→]1997, 『もうひとつの青春——同性愛者たち』文春文庫。
- 石川良子, 2007, 『ひきこもりの〈ゴール〉』青土社。
- 伊藤智樹編著, 2013, 『ピア・サポートの社会学』晃洋書房。
- 梶原千遠, 2004, 『大人はわかってこない』光文社。
- 勝山実, 2011, 『安心ひきこもりライフ』太田出版。
- 貴戸理恵, 2004, 『不登校は終わらない』新曜社。
- 貴戸理恵, 2013, 『女子読みのススメ』岩波ジュニア新書。
- 心の手紙交流館編, 2001, 『Hiki ♥ Com'i (1号)』子どもと教育社。
- 草柳千早, 2004, 『『曖昧な生きづらさ』と社会——クレーム申し立ての社会学』世界思想社。
- 三浦勇夫, 2009, 『駅前医者「宵越しのストレスは持たない」生き方』新講社。
- なだいなだ, [1993→]1998, 『こころ医者の手帳』ちくま文庫。
- 野村佳絵子, 2008, 『かなりあしょっぶへ、ようこそ！——摂食障害がくれた宝物たち』筒井書房。

- 大阪精神神経科診療所協会うつ病診療研究グループ, 1998, 『うつ病患者と家族の支援ガイド——精神科医の診療最前線』プリメド社。
- 斎藤学編, 1991, 『カナリアの歌——“食”が気になる人たちの手記』どうぶつ社。
- 斎藤学, 1993, 『生きるのが怖い少女たち——過食・拒食の病理をさぐる』光文社。
- 斎藤環, 1998, 『社会的ひきこもり——終わらない思春期』PHP新書。
- 柴田元幸, 1996, 『生半可な學者』白水社。
- 澁谷智子, 2009, 『コーダの世界——手話の文化と声の文化』医学書院。
- 多田基, 2007, 「働く人はサポーターを持とう！」『こころの元気+』6: 5-6。
- 田中美津, [1972→]2004, 『いのちの女たちへ——とり乱しウーマン・リップ論』パンドラ。
- 特定非営利活動法人 ASK, 2004, 『ASK 選書7『ひきこもり』という悲鳴』アスク・ヒューマン・ケア。
- 特定非営利活動法人アサーティブジャパン, 2007, 『アン・ディクソン来日記念講演——対立を超え対等な地平へ』特定非営利活動法人アサーティブジャパン。
- 富田香里, 1997, 『それでも吐き続けた私』講談社。
- 東京母の会連合会編, 2000, 『ざけんなよ』集英社。
- 上野千鶴子・信田さよ子, 2004, 『結婚帝国 女の岐れ道』講談社。
- 卯月タラ, 2003, 『今日一日だけ生きてみよう』雲母書房。
- 山口真紀, 2011, 「自閉者の手記にみる病名診断の隘路——なぜ「つまづき」について語ろうとするのか」立命館大学生存学研究センター編『生存学』第3巻: 92-105。

(Endnotes)

- 1 ほとんど唯一の例外は、江原由美子による田中美津についての分析である(江原 1985)。また草柳千早は、キツセラの社会問題についてのクレーム申し立てが強い主体を想定しているのに対して、今日の「曖昧な主体」(草柳 2004:79)の「曖昧な生きづらさ」を問題にすると論じており、本稿の問題意識に近い。しかし「分かってこない」と訴える人は、草柳の言う「問題経験」のさらに一歩手前にあり、神経性無食欲症の女性の手

紙にあるように「何かをうったえたいのですが、自分でもよくわからない」(斎藤 1993:71)のである。

- 2 フィクションの小説や漫画、歌の歌詞のデータ(たとえば忌野清志郎の詞にはしばしば出てくる)も収集しているが、本稿では用いていない。別の機会に論じる予定である。
- 3 実際には、会社では上司は分かってこないと思ひ、家では妻に分かってこないと思われているような人はいるはずである。
- 4 ただしここでの貴戸の立場はやや不明確ではある。まず、「分かってもらえない」ことにじれてもいると述べているように、「分かってこない」という感覚もある。さらに、別の著書において

「思春期の強烈な自我は、「中学生とはこういうものだ」「うちの子はこういう子だ」という大人達の「理解」という名の決めつけを、徹底して退けようとしています」(貴戸 2013:25)と述べていることもふまえると、貴戸の言いたいことは類型(3)の理解の拒否に近いのかもしれない。ここでは、相関分類で論理的に考えられる(1)理解に対する倦怠という類型の存在を、貴戸の議論が示唆していると言うにとどめたい。

- 5 3.(1)で論じたように、こう思えるのは、自分の趣味が上位にあると思える場合にかぎられる。
- 6 一番問題なのは、なぜ田中はそこで踏みとどまったのかであるが、現時点ではよく分からない。